



Title	直示的思想はいかに対象依存的か
Author(s)	前田, 高弘
Citation	年報人間科学. 1997, 18, p. 151-170
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/6769">https://doi.org/10.18910/6769</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

---

## 直示的思想はいかに対象依存的か

### 〈要旨〉

直示的思想は対象依存的である。この主張が形而上学的テーゼであることを確認したうえで、それに対する主な批判を検討する。本稿の目標は、対象依存性のテーゼがその批判に対して擁護できることを示すことによつて、直示的思想がいかに対象依存的であるかを明らかにすることである。直示的思想が知覚に依存するという事実を重視することが、私の基本的な戦略である。

### キーワード

直示的思想、対象依存性、知覚、内容、心理学的説明。

前田  
高弘

---

Gareth Evans (1982)は、指示対象が存在しなくては成立し得ないような思想をラッセルに因んで「ラッセルアン」と呼び、一般に単称思想はラッセルアンだと論じた(が、以下では「ラッセルアン」を「対象依存的」とし、そのテーゼを支持する人々をラッセルアンと呼ぶことにする)。ここで単称思想とは、個体への指示を伴い、純粋に記述のないし一般的思想(即ち、その表現が量化的にパラフレーズされる思想)に対置されるものとして規定されている。この規定自体は、指示対象の存在を要求していない。<sup>①</sup>だから、ある思想が対象依存的であると言われるとき、定義によってそう言われているのではない。それは、ある対象を指示あるいは同定するとはどういうことか、特定の対象について考えるところはどういうことかといった問題に対する実質的な見解を含んでいるのである。

本稿は専ら、直示的思想(即ち、対象の知覚的同定を伴う思想)の対象依存性について論じる。もちろん、単称思想には他にもいくつかのタイプがあり、そのタイプによって対象への依存の仕方(それが対象依存的であるとして)異なるであろうが、直観的に言ってもし直示的思想が対象依存的でないとするれば、それ以外のタイプの思想が対象依存的であることはありそうにないだろう。また、直示的思想に関連して、物理的对象を直示的(知覚的)に同定するとはどういうことか、という問題はそれ自体興味深いものであると私は考える。

## 1

始めに、まず対象依存性の意味をより明確にする必要があるが、それは次の例によって示されよう。<sup>②</sup>一郎、二郎、三郎は、以下に述べる違いを除いて、あらゆる点(身体の物理的構成や、生まれてから今まで経験したこと等々)でいくら似ていても構わない。今、彼らはそれぞれ非常によく似た環境に置かれ、それぞれが一匹の危険な猫と向かい合っていると思っている。即ち、彼らは皆「あれは危険な猫だ」という文によって表される推定上の思想を抱いている。その結果、彼らはその猫を蹴飛ばしてやろうと思つて、それに向かつて駆け出す。さて、問題の違いとは次のことである。一郎と二郎は異なる猫(それぞれタマとミケと名付けよう)と向かい合い、三郎は何とも向かい合わずただ幻覚を抱いている。この場合、直示的思想は対象依存的であると考えれば、一郎と二郎は異なる思想を抱いており(彼らはそれぞれ別の猫について考えているのだから)、三郎はその関連するタイプの思想を抱いていない(彼は何とも向かい合っていないのだから)ことになる。

この例からわかるように、対象依存性のテーゼは、思想(思考)という心的カテゴリー<sup>③</sup>についての形而上学的テーゼである。つまり、対象の役割は、思想の同定に関して単なる発見的価値しかもたないのではない。思考主体の知覚環境に存在し、思想のターゲットであるまさにその対象が、当の思想を構成していると考えられている。

だから、もしそのテーゼが正しければ、直示的思想はその指示対象に本質的に依存しているのである。

この考え方は、次節で見られるように、極端な外在主義として、外在主義そのものは否定しない哲学者たちから批判されている。<sup>⑤</sup> 私は本稿で、この種の外在主義がその批判に対して擁護できることを示したい。

## 2

この節では専ら批判の呈示に努める。主な批判は以下の三つに分けられると思う。

### a. 行為の心理学的説明から

直示的思想が行為の説明と密接に結び付いている（従って、直示的モードを記述的モードによって置き換えることはできない）という点については、ラッセリアンとその批判者との間に同意がある。<sup>⑥</sup> それ故、対象依存的なものとしての直示的思想が行為の説明において本質的な役割を果たさないことが示されれば、それは有効な批判になるであろう。だから、反ラッセリアンらの議論に共通してこの種の批判が見られるのはおかしくないのだが、Harold Noonanはやや執拗なほどにそれを追求している。<sup>⑦</sup>

Noonanは次のようなテーゼを主張する。行為が具体的（物理的）対象に向けられている（その対象を指示する単称名辞を含む記述の

下でその行為が意図的であるように）ときは常に、その記述の下で意図的なその行為の、対象に依存しない十分な心理学的説明が可能である。このテーゼ自体は対象依存的思想の存在を否定していないが、もしこのテーゼが正しければ、そのような思想は行為の説明にとって余分（*redundant*）であることになる。このことは、そのような思想が、厳密に言えば、「思想」や「心理的狀態」ではなく、心理的狀態と外在的要素の混合体であると考えるべき動機を与える。それ故このテーゼは、対象依存的思想の身分を単なる言葉の定義上のものにしてしまう可能性をもつと言える。

そのテーゼを裏付けるために、Noonanが与える議論は次のようなものである。私が一匹の猫を蹴り、そして私の行為が、その猫を指す名辞を含む記述の下で意図的であるとすると、その場合、その記述の下における私の行為の十分な心理学的説明が存在するだろう。そこで、背理法のために、この行為が上記のテーゼに対する反例であるとしよう。すると、その猫を指す名辞を含むどのような記述の下においてもその行為の対象非依存的で十分な心理学的説明は存在しないだろう。さて、次のステップとして、私の観点からは全てが第一の状況と同じであるが、実はその猫が幻覚であるという状況を想像してみる。そのような状況でも、私は第一の状況と全く同じように、猫がいると私が思っている場所に向かって駆け出すに違いない。問題は、その私の行為をどうやって説明するのか、である。なぜなら、第一の猫が幻覚でない状況が上記のテーゼへの反例であるとすると、その状況で使うことのできた説明が第二の幻覚的状

況では使えないからである。そこで、この二つの状況を二つの表に書き出せば次のようになる。最初の表には第一の状況における私の心理的狀態の内容、もう一つの表には第二の状況における私の心理的狀態の内容、この二番目の表が最初の表において既に言及されていること以外の何物にも言及していない、ということである。従って、上記のテーゼの反対者は次のディレンマに陥る。幻覚的状況における幻覚者の行動が彼の心理的狀態の内容に言及することによって合理的に説明されることを否定するか、それとも、非幻覚者のもつ思想内容の内、幻覚者が非幻覚者と共有する適当なサブセットが幻覚者の行為を説明するのに十分であることを認めるか、である。第一の選択肢が論外であるとすれば、第二の選択肢を選ぶほかない。だが、これを選ぶのは致命的である。というのも、幻覚者が非幻覚者と共有する心理的狀態のサブセットが前者の行為の説明に十分であるなら、それは後者の行為の説明にも十分であろう。彼らは全く同じ行動をしているのだから。

#### b. 説明とコミュニケーションの区別から

確かに、我々の常識心理学的直観は、一郎と二郎がそれぞれ異なる思想を抱いているということを拒否しない。なぜなら、彼らは異なる対象について考えているのだから。だが、Carruthers (1987, pp. 26-28, 1988, pp. 92ff.)によれば、他でもないその対象についての思想であるということが直示的思想にとって本質的であるように見えるのは、思想内容の記述において我々が持つ二つの全く異なる

関心をはっきり区別していないからである。我々は、説明とコミュニケーション(情報獲得)の二つの関心を持つ。どの対象について考えられているのかが重要であるように思われるのは、世界についての情報獲得の方に関心があるからだ。例えば、タマが実はあなたの飼った猫であるとして、それを一郎が知らない場合、私があなたに「一郎は、あなたの猫が危険だと思っている」と言うとき、もちろん、文字通り一郎がそのように思っていると言っているわけではない。ここでは、一郎がその猫をどのように捉えているかよりも、どの猫についてであるかの方が重要だからである。しかし、思想内容の観念と概念的に結び付いているのは、説明的関心の方である。常識心理学を、専ら行為を説明する理論として見た場合、幻覚を抱いている三郎が、ラッセリアンの言うように、関連するタイプの思想を持ち損ねているとするのは直観に反するだろう。この場合の我々の直観は、一郎、二郎、三郎の行動は皆同じであり、これらは皆同じ思想の存在によって説明されることを支持するのである。

それでもまだ、一郎らの行動に何か重要な違いがあるように見えるとすれば、それはオリジナルの例に責任があるのだろう。確かに、一郎と二郎は違う猫を蹴るのだし、三郎の足は空を切るだけだ。そこで、Carruthersは例を次のように変える。彼らは、猫に向かって駆け出す代わりに、公衆電話の方向へ走って行って保健所に連絡し、それから付近の住民に注意を呼びかけて回った、というように。この例であれば、一郎らの行動が皆同じであり、従って皆同じ思想によって説明されることがごく自然であると思われるだろう。

結局、Carruthersによれば、直示的思想の同一性は以下のような規定される(1987, pp.33ff.)。

(C) 直示的思想のトークンは全て、思考主体が同じ種類のものと見なす対象に同じ述語を帰属し、その対象を自己中心的(egocentric)空間の同じ位置を占めるものとして表す知覚にその思想に基づいているとき、同じ内容を持つ。

この規定によれば、同じ直示的思想が、多くの異なる対象に関して、多くの思考主体らによって抱かれることが可能である。さらに、(彼によれば)対象が存在しなくても可能なのである。

### c. 自己知から

自分自身の心理的状态の内容についてのアプリオリな(経験的検証に依らないという意味で)知識に関して、ラッセリアンの考え方は受け入れ難い認識論的帰結をもたらす、とZouanは言う<sup>⑩</sup>。彼によれば、常識的に我々は、特定の外在的対象の存在についての知識を獲得するのに先立って、自身の心理的状态の内容についての知識を獲得できると考えている。だが、この考えが正しく、かつラッセリアンも正しいとすると、我々はそのような自己知から、アプリオリに、特定の外在的対象の存在についての知識に到達できることになる。しかし、これは全く受け入れ難い。単に私自身の心の状態についての知識から、どうして特定の猫の存在をアプリオリに導き出せるのか。

### 3

前節で見た批判を検討する前に、ラッセリアンの一人であるGory McCulloch (1988a, b)がどのように対象依存性のテーゼを擁護しているかを見ることによって、問題点を明確にしたい。

McCullochは、いわゆる基礎的行為のレベルでは一郎らの行動が全く同じであると認めることによって、aのタイプの議論を受け入れてしまう。それでも、彼によれば、ラッセリアンの立場を維持できる。なぜなら、標準的な信念帰属の状況においては、我々の常識心理学的実践は、基礎的行為を厳密に解釈した上でその行為を、説明的に余分な要素を切り詰めた志向的術語によって説明する、ということによって成り立っているのではない、とラッセリアンは主張するだけでよいからである。標準的な実践は、率直に思考主体を周りの環境の対象(タマなど)に反応するものとして捉え、その反応を関係する対象を巻き込む仕方で理解することによって成り立っており、このことは誰も否定できないだろう。だから、ラッセリアンの目的が単に実際の常識心理学的実践の特徴を記述することである限り、Zouanらの議論は無視できる。たとえ、彼らが修正主義的な態度を取って、彼らの議論に適合するように我々の実践を改めなければならぬと主張しても、我々はそうすべき理由を持たない。実際、日常の実践において、行為をそのように厳密な仕方では理解するのは馬鹿げているし、現実の行為の説明は世界についての情報を

もたらずのにも寄与しているからである。

私は、反ラッセリアンに対するこのような答え方は不十分であると思う。結局彼らが関心を持っているのは直示的思想の形而上学的身分であり、そして既に述べたようにラッセリアンのテーゼも形而上学的テーゼであるから、彼らの議論そのものの妥当性を問う必要がある。実際に Noonan (1991, p.2, n.1) が、a のタイプの議論を受け入れた上でどうして対象依存性のテーゼが正しいと言えるのか分からないと不満を述べるのも尤もである。我々が実際に直示的思想をどのように帰属するかに訴えるだけでは、対象依存性の論拠を示したことはない。実践において対象は発見的役割を持つに過ぎない、と反ラッセリアンは答えるであろうし、ラッセリアンもそのような弱い意味での対象依存性を主張しているのではないからだ。McCulloch の狙いは、常識心理学の実践がもつ対象依存的性格を強調することにより、直示的思想を非対象依存的に捉えることへの動機を失わしめることにあるようだが、反ラッセリアンにとって肝心なことは、対象依存的思想が行為の説明において本質的な役割を果たさないという論点であり、それが彼らの動機になっている。McCulloch は、まさにその論点を受け入れてしまうことにおいて誤りを犯しているのであり、彼の議論が彼らを満足させないのもそのためである。<sup>①</sup>

#### 4

しかしながら、対象依存的な直示的思想の観念が実際の常識心理学的実践を反映しているという指摘には、一つの重要なポイントがある。「考える」、「信じる」、「見る」等の、内容を伴う心的述語(いわゆる命題的態度を表す述語)の表す概念が、我々の常識心理学的実践に起源を持つものである限り、実際の実践を反映しているかどうかという基準は、その概念に関するテーゼを評価する重要な指標であるに違いない。そして確かに、我々の日常の実践には、反ラッセリアンよりもラッセリアンを支持すると思われる側面が存在する。

その側面は以下の議論によって示されよう。直示的思想を帰属(または伝達)する日常的な場面とは、帰属される人(または伝達する人)と帰属する人(または伝達される人)とが同じ環境に居合わせることである。<sup>②</sup> さて、その場面において、次のような帰属がなされたとしよう。

あれは危険な猫だ、と一郎は考えている。

その場合、その帰属は、

あれは、一郎が危険だと考える猫である。

という単称命題や、

一郎が危険だと考える猫が存在する。

といった存在命題を含蓄するのが普通であると考えられる。つまり、

直示的思想の帰属は一般に、帰属する側自身による対象の直示的  
定及びその対象への存在論的コミットを伴っているのである。<sup>⑬</sup> だ  
ら、もしその対象が存在していなければ、「( )」と一郎は考  
えている」という述語に直接「あれは危険な猫だ」という直示的言明文  
を代入するという形の帰属が不可能になる。その場合、我々は直示  
的思想を帰属するのではなく、端的に幻覚を帰属することによって  
彼の態度を理解するだろう。ラッセリアンにとって肝心な点は、直  
示的思想によって態度を理解する通常の仕方が、幻覚によって態度  
を理解する仕方とは全く異なっている、ということにある。

ここで、「内容」という観念について言及する必要がある。ある  
心的状態が何らかの思想を具現化した状態であると言えるために  
は、そこに何らかの内容がなければならない(内容のないところに  
思想はない)。従って、ラッセリアンが、幻覚者は直示的思想を欠  
くと言うとき、直示的思想に対応するタイプの内容がそこにはない  
と言っていることになる。<sup>⑭</sup> ラッセリアンに言わせれば、幻覚者はせ  
いぜい架空の直示的内容をあてがわれるに過ぎない。架空の内容を  
あてがうことは、その内容の存在にコミットすることにはならない。  
我々は存在しないものについて、それが存在するかのような振りを  
して語ることができる。ところが、反ラッセリアンの議論はしばし  
ば、幻覚者の心的状態が「内容」を持つことを自明の前提のように  
しているところがあり、その点で彼らはラッセリアンに対して論点  
先取を犯している。<sup>⑮</sup> 彼らが幻覚者に「内容」を安易に認めてしま  
うのは、恐らく、(パトナムの双子地球以来の)内容を「広い」のと

「狭い」のとに分ける二分法を受け入れてしまっているからだろう。<sup>⑯</sup>  
だが、ラッセリアンは「狭い内容」などというものを認めない。ま  
た、そのことは帰属の日常的な実践のあり方に適っていると見える。  
というのも、日常の実践に鑑みれば、内容とは、「( )」とSは考  
えている」という述語に適切に(主体による対象の捉え方を尊重す  
る仕方)で)代入される文によって表されるものであると言うことが  
でき、そして前段落で見たように、幻覚者に非幻覚者と同じ仕方で  
態度を帰属することはできないからである。<sup>⑰</sup>

次に、直示的思想の伝達の場合を考えてみよう。今度は私が直示  
的思想を抱き、かつそれを伝達する側である。そして、今私は目の  
見えない人と居合わせているとする。さて、もし私がその人の目の  
ことを知っていながら、何の予備知識も与えずにいきなり「あれは  
危険な猫だ」とその人に教えたとすればどうであろうか。それは非  
常に失礼だ、というのが大方の反応であろう。直示的思想の理解は、  
聞き手にその対象を直示的に同定するために必要な能力を要求し、  
目の見えない人はその能力が決定的に欠けているからである。これ  
によって私が示唆したいポイントは次のことである。即ち、直示的  
思想は、対象を直示的に同定するための知覚システムが正常であり、  
かつ思考主体がそれをそれを適切に利用できることを前提条件にし  
ている。このポイントによって私は、Caruthersが前段落の議論に  
対して唱えるであろう不満に答えられると思う。日常の実践におい  
て、幻覚者に非幻覚者と全く同じように内容を帰属することはでき  
ないということも認めても、内容が同じでないことを認める必要は

ない。幻覚者は、反事実的に、実際に猫が適当な位置に存在し、それを見て彼が「あれは危険な猫だ」と考えていた場合と全く同じ思想内容を持つ、と言ってどうしていけないのか、と彼なら反論しそ  
うである(cf.1987, p.24)。だが、この反論は、正常な知覚者と幻覚  
者がまさに同じ直示的モードの思想内容を持つことができる前提  
している。すぐ前に示したポイントは、まさにこの前提を拒否する  
ものである。それはちょうど、目の見えない人に対し、目が見えな  
いというまさにその事実を無視して、もしその対象が彼の目の前に  
あったなら彼が持ったであろう視覚内容を帰属することの不合理さ  
に似ているのではないだろうか。

以上の議論を踏まえると、上記の a タイプの批判は一郎と二郎の  
二人（即ち非幻覚者）と三郎の違いを否定するもの、そして b タイ  
プの批判はさらに一郎と二郎の違いを否定するものとして整理する  
ことができるだろう。従って、以下の議論の焦点は、一つは、非幻  
覚者と幻覚者が同じ直示的モードの心的内容を持つことができるか  
ということ、そしてもう一つは、直示的思想の同一性を対象の数的  
同一性ではなく質的同一性に基づかせるのは妥当であるかというこ  
とである。

## 5

幻覚を持ち出す議論に対しては予め注意しておくべきことがあ  
る。それは、いわゆるデカルト的直観に訴えるのは無効だというこ

とであり、これは批判者らも程度の差こそあれ自覚していること  
である。ここで私の言いたい論点は、まさに Carruthers (1987, p.18)  
の言葉を引くことによって示される。即ち、「私の見解では、思想  
はその存在を、ものを通時的に規則的な仕方でも分類する能力や、対  
象を空間に位置づける能力といった様々の非意識的な能力に依存し  
ている。それ故、適切な能力を欠くために実は何も考えていないと  
きでも、人は自分ではある種の思想を考えていると思ひ込むことが  
可能なのである」。なぜこの論点を幻覚論法に適用しないのか。

Carruthers はその論点を、色を規則的に分類できない人の例を用  
いて説明している (ibid. p.19)。つまり、色の分類能力を混乱させる  
薬物を知らない間に投与された人は、我々が「熟れたトマトは赤い」  
と考えるときと同様に、違和感を感じることなく「この草は赤い」  
などと考えるかもしれないが、必要な能力を欠いているために、そ  
の思想は成立していないのである。では、なぜ彼は幻覚の例では思  
想の成立を認めてしまうのか、という疑問が当然起こる。推測だが、  
多分、この論点をより見えにくくする例で彼は考えているからでは  
ないだろうか。2 節で紹介したように、彼は自分の主張をより受け  
入れやすくするために例を作り替えている。だが、これは McCul-  
loch (1988b, p.99) も指摘するように、オリジナルの例と本質的に  
異なるわけではない。一郎らの行動の元々の動機になっている推定  
上の直示的思想が対象依存的であるか、という問題に変わりはない  
からである。

そこでもし、直示的思想を抱くことは（見ることや思い出すこと

と同様に)ある種の環境的条件と、主体の知覚・認知システムが正常に機能していることを必要条件とする、という論点をストレートに幻覚論法に適用すれば、幻覚者は関連する知覚システムが正常に機能していないのだから、彼は直示的思想を持ち得ないと論じることが出来る。が、ここで、知覚システムが正常に働かないとはどういうことかをもう少し厳密にする必要がある。知覚システムは複数の感覚様相から成るが、人間にとって対象を捉えるのに取り分け重要なのは視覚、聴覚、触覚であろう。嗅覚が寄与する場合もあるが、味覚が寄与することはまずない。だから、知覚システムの正常性は、ここでは専ら前者の三つの感覚様相に関するものである。ただ、通常はその三つが互いを補い合いながら対象を捉えているとしても、それぞれの重要度に違いがあることは確かである。私は、視覚が決定的に重要であると考える。もちろん、対象を見ることはできても、その対象が何であるかを識別できないといった障害(一般に「失認」と呼ばれる)など、視覚障害にも様々なものがある。だがここで問題にしているのは、特定の対象を現実のものとして識別し、かつその対象を一瞬ではなくある程度の時間に互って直示的に同定する(空間に位置づける)ために必要な知覚システムである。それ故、知覚システムが正常に働いていると言えるためには、少なくとも視覚がその要件を満たしている必要があり、その要件を満たしてさえいれば、知覚システムが正常に働いているところでは言っていないらう。

さらに、幻覚と錯覚を区別する必要がある。前者は(ここでは)

知覚の異常を意味するが、後者はそうでない。視覚は進化における適応と妥協の産物であり、情報処理のミスはしばしば不可避的なものだが、それは文字通り存在しないものを「見る」のとは事情が異なっている。例えば、一郎が見ている猫が実はホログラムであり、物体としての猫はそこに存在しないとしても、確かに彼はそのホログラムを見ているのである。(さらに言えば、精巧なホログラムは一郎の網膜上に実物の猫の場合と全く同じ二次元像をもたらし得るが、幻覚者の網膜には猫らしきものは何も写っていない。このことは直観的に、両者に重要な因果的な違いをもたらすのではないかという疑いを抱かせる。)それ故、我々はそれを直示的に示すことができる。また、「対象」という概念は物体だけに適用されるわけではないから、そこには指示対象があると行ってよい。従って、この場合は物体としての猫が存在しなくても、一郎がその対象についての直示的思想を持つ余地(恐らく誤表象(misrepresentation)という形で)はある、とラッセリアンは認めることができる。

以上の議論を踏まえると、明らかにZoonanの描く幻覚者は知覚が正常に働いているとは言えないだろう。実際の幻覚というものは、知覚よりも高次のレベルにおける混乱が原因であることが多いようである(だからそのような患者は幻覚と実際の知覚を区別できる)。だが、Zoonanの例においては、彼自身が強調するように、非幻覚者と幻覚者の違いはその環境に猫が存在するかしないかではない。それ故、その幻覚は知覚システムの異常であることは間違いない。従って、次のように言うことができる。幻覚を持ち出す論者は、

たとえ知覚が正常に機能していなくても、そのことによって幻覚者が直示的モードの思想内容をもつことを妨げられはしない、ということを示す必要がある、と。しかしながら、彼らは、非幻覚者と幻覚者の心的状態が行為の説明において全く同じ因果的役割を果たす、という議論によってそのことは示されているではないか、と言うかもしれない。私は、その議論によってはそのことは決して示されていない、ということをも7節で論じるつもりである。

## 6

幻覚者は直示的モードの思想内容をもつための要件を欠いているという前節の議論が仮に受け入れられ、従って三郎は直示的思想をもたないことが認められたとしても、一郎と二郎の間に本質的な違いがあるかという問題は残る。つまり、直示的思想の対象依存性はラッセリアンの主張するような意味で本質的であるのか、という問題である。本質的でないか答えることは、2節で見た Carruthers による直示的思想の同一性基準 (C) を支持することに等しい。そこでこの節では、その基準を疑わしめる一つの根拠を示したい。

次のような推論形式を考えてみる。

a は F だ。

a は G だ。

それ故、F でありかつ G であるものが存在する。

この推論の妥当性はもちろん、第一前提における「a」と第二前提

における「a」が同一であることに基づく。今、この形式の推論を一郎と二郎がそれぞれタマとミケについて行うとしよう。即ち、一郎はまず次のような判断をする。

あれは危険な猫だ。〔あれ〕↓タマ)

彼は、猫に警戒されないよう数秒間目をそらした後、再び視線を戻し、次のような判断をする。

あれは陽気な奴だ。〔あれ〕↓タマ)

その結果、次のように結論する。

それ故、危険でありかつ陽気な猫が存在する。

二郎も一郎と全く同じ仕方でも猫を観察するのだが、彼の場合、目を離した一瞬の隙に素早く別のそっくりな猫(ノラと呼ぼう)がミケと入れ替わり、二郎はそれに気づかず次のようになってしまったとする。

あれは危険な猫だ。〔あれ〕↓ミケ)

あれは陽気な奴だ。〔あれ〕↓ノラ)

それ故、危険でありかつ陽気な猫が存在する。

Carruthers によれば、この二つの推論は全く同じであるはずだ。というのも、基準 (C) によれば、これらの推論を構成する直示的思想はそれぞれ全く同一だからである。だが、一郎のは妥当な推論を表しているのに対し、二郎のはそうでない。(ここで推論が妥当であるとは、前提が真ならば、まさにそのことによって結論が真となる、ということである。)なぜこういうことになるかといえば、そもそもこの推論形式は対象の質的同一性ではなく数的同一性に基づく

くものであるからだ。二郎の推論も、非明示的にあれそのような理解の下でなされたはずであり、二郎はミケとノラが同一の猫ではないという事実に関心でいられるわけではない。その証拠に、もし彼が、猫が入れ替わっていることに気づいていたら、ノラについて同様の判断をしても、そのような推論はしなかつたはずである。<sup>23</sup>

我々が猫を直示的に指示するとき、物体（即ち個別に数えられるもの）としての猫を指示するのが普通だろう。もちろん、猫を普通の猫性なるものの部分的現れとして指示する場合があつてもよい。物体の指示よりも基礎的なレベルの指示はそういうものであり得る。言語を修得している段階の幼児は個々の猫を区別していかないかもしれない。また、猫が個々の鼠を区別していかなくてもおかしくはない。ただ、直示的思想の同一性基準としての（C）は、実質的にそのような例にしか当てはまらないのではないだろうか。（C）は、対象を（可算の）物体として捉えることを要求しない。だが、我々が対象を直示的に同定する場合は専ら、物体としてそれを捉えている。

（C）を支えるポイントは、説明とコミュニケーションの区別であつた。Cartnersによれば、思想についての我々の観念は一樣ではないが、しかし直示的思想の観念は行為の説明と密接に結びついており、それ故（C）によって同定されるべきである。だが、対象が物体である場合、上記の例のように、しばしば対象の数的同一性に基づく推論がなされ、その推論に基づいて行為がなされることもあり得る。また、そもそも思想というものは行為を動機づけるだけ

でなく、同時に、公共的には伝達可能性と、個人の内では推論や経験的検証によつて知識へと発展する可能性（また知識になることによつて新たな行為を動機づける可能性）をも潜在的に秘めているものとして考えてはいけぬ理由があるだろうか。少なくとも、Cartnersが考えるほど、我々の思想の観念が分裂しているわけではないだろう。

以上を考慮すると、物体が対象である場合、その直示的思想に於て、対象の質的同一性よりも数的同一性の方が重要であると考えるのが理に適っているように思われる。<sup>24</sup>

## 7

前節で例として用いたような推論形式が示唆することは、同一の対象がある程度の時間に互つて補足し続ける能力が直示的思想に於て本質的であるということである。実際、もしタマとそっくりな猫がタマの周りにたくさんいれば、タマについての直示的思想をもつことは難しくなるだろう。少なくとも、対象の知覚から、その対象についてのいろいろな判断に至るまでの間は、その対象を補足し続けることができなければならない。つまり、直示的思想は同一の対象を補足し続ける知覚システムのダイナミックな性質に依存しているのである。思うに、反ラッセリアンらはそのことを見落としている。

私は既に、知覚システムが正常に機能していないところに直示的

思想はない、と論じた。だが、5節の終わりで触れたように、反ラッセルアンは、知覚システムが正常であるかに関わらず、心的状態のもつ因果的効力が同じであれば直示的思想の成立及び同一性によって十分である、と主張する可能性がある。私は、上記のポイントによって、因果的効力が知覚システムの機能に関係なく同じであるとは決して言えないことを示したい。

まず始めに確認しておくべきことは、特定の例において全く同じ因果的効力をもつように見えることは、実際に同じ因果的効力をもつことを保証しないということである。同じであると言えるためには、それらが同じ結果をもたらすことが一般的に言えなければならぬ。だから、猫を一瞬見た後すぐ公衆電話の方向へ走って行く行動が、幻覚者の場合と変わらないとしても、もし、もう少し長い間その猫の方を見ていたら、そして、猫に向かって走っていたならば、行動は違っていたものになる可能性がある。正常な知覚とそうでないものとの差異は、時間をかけることによってより明らかになるという性質のものだからである。(だから、瞬間的に何かを見たような気になっても、その位置へ目の焦点を一定時間合わせてみて該当するものが何もなければ、単なる気のせいだということになるし、また残像なども、視線を動かさずと一緒に動き、時間が経つにつれ薄れていくことによつて気づかれる。)

実際、猫を蹴飛ばす行動の場合、正常な知覚者と幻覚者では行動が違ったものになる可能性が高いと考えるべき理由がある。No. 100が自分のテーゼを裏付けるために示している例では、正常な知

覚者とそれの反事実的な対応者である幻覚者とは、違いは猫が存在するかしないかでしかなかった。だがこれは、知覚についての我々の常識的理解から見れば、非常にありそうにないことである。即ち、猫が存在しないのに、幻覚者が非幻覚者と同じ方向に走り、同じ位置に止まって、同じ空間的領域に向けて足を振り上げるのは奇跡に近い。なぜなら、非幻覚者が猫に向かって行く途中で、もしその猫が右の方へ動き出していたら、彼は適切に走る方向を右に修正したのであるが、幻覚者も同じように方向を修正していたであろうとは考えにくいからである。

このような意見に対して、幻覚者は非幻覚者と全く同じ経験をもつことがその例の前提として保証されているのだから、幻覚者が非幻覚者と全く同様に振る舞うのは少しもおかしくないなどと言われるかもしれない。だが、そもそもそのような前提こそが、知覚についての常識的理解に反するのだ。なぜなら、我々は視覚経験というもの因果的に理解しているからである。即ち、例えば、猫がマットの上に座っていると内容の視覚経験は、猫がマットの上に乗って座っており、そしてその猫が見える場所に主体が位置し、臉を開いた彼の目が猫の方に向き、その目と猫の間に遮るものがない、等の事実によつてもたらされると我々は理解している。また、もしその猫が立つて右に移動すれば、彼の視線も右に動くことが予想される。だから、ともに非幻覚者である一郎と二郎を比べた場合、もしタマとミケが同じように右に動いていたとしたら、一郎と二郎も同じように反応したであろうと考えることに無理はない。彼らの経験はそ

の対象に因果的に左右されると我々は考えているからである。つまり、幻覚者と非幻覚者の決定的な違いは、前者には、知覚を介した主体と対象の間のダイナミックな関係が欠けていることにある。経験が外的事態に因果的に左右されるからこそ、対象とのダイナミックな関係が成立し、行為の成功する可能性を高めることができる。それ故、もし猫が右の方へ動いていたなら、幻覚者も非幻覚者と同じ経験をもっていたであろうとは想像しにくいのである。少なくとも、その両者が全く同じ経験をもちことを前提として保証することの正当性が示されなければならない。

非幻覚者の場合、対象との間にダイナミックな関係が成り立っているということは、思うに、「關係的」な特性が直示的思想の本質的な部分をなしていることを示唆する。その特性は、Noonanが見做すように単なる付随的なものではないのだ。そのことを明確にするには、幻覚者の例を少し変えて、猫がいると幻覚者が思っているその場所に本物の猫を置いてみればよい(cf. Noonan 1991, p. 7)。前にも触れたが、実際の幻覚者は幻覚と本物の知覚を区別できることが多いらしいが、ここでは仮定によって、その幻覚者は本物と幻覚を区別できない(まさに彼の知覚は異常だから)。またもし、その区別ができるとすれば、正常な知覚と幻覚には違いがあることになり、Noonanにとってはまずいだらう。そこで、その本物の猫は幻覚の猫とびったり(奇跡的にも)重なることによって、言わば隠されているとしよう。そうすると、元の例では幻覚者の足は空を切るだけであったが、この例では、彼は非幻覚者と同じように猫を實際

に蹴ることになる。もし、「關係的」な特性が内在的なものではなく、単に付随的なものでしかないとすれば、この幻覚者と非幻覚者とは、その行動に関しては何の違いもないことになってしまう。だが、確かに我々は両者の間に違いを認める。それは、一方は単なる(奇跡的な)偶然に過ぎないのに対し、他方はそうではないという認識である。その認識は、上記のような知覚についての因果的理解に基づいていると言えよう。

Noonanはその幻覚者と非幻覚者の間の直観的な違いを、知識と(偶然的に)真である信念の違いによって説明している。非幻覚者は自分の前に危険な猫が存在することを知っているのに対し、幻覚者はたまたま真である信念をもつが故に、彼が猫を蹴るのは偶然である。だが、これがその直観的な違いの説明であれば、知識と信念はまさに同じ内容をもつことができるのだから、この例は、非幻覚者の行為の説明にとって対象依存的な心的状態が本質的であることを示してはいない。Noonanはそうに論じる。

Noonanの説明の鍵は、知識と信念はまさに同じ内容をもつことができる、という点にある。その同じ内容とはどのようなタイプの内容であるか、がここでは肝心である。ラッセリアンによれば、この例において幻覚者と非幻覚者が共有できるタイプの内容とは、存在命題の内容だけであり、存在命題は単称命題とは対照的に対象依存的ではない。だが、行為の説明とより密接に結び付くのは直示的モードの内容であり、幻覚者が直示的モードの内容をもつことができるかは全く示されていない。そして、ラッセリアンはまさにそれ

を否定する。幻覚者は、いくら本人がそのつもりでも、直示的モードの内容を伴う信念なし思想などをもつことはできない。そう考えることは、この場合、我々の直観に反しない。幻覚者自身は直示的に猫を捉えているつもりでも、彼が捉えているのは幻覚の猫であって本物の猫ではない、というのが知覚についての我々の理解の仕方であるからだ。

知識と偶然的に真である信念の違いによる説明が示唆する一つのポイントが、思うに、次のことである。非幻覚者のもつ直示的モードの内容は、一般にその含意する存在命題が真として保証されるのに対し、幻覚者のもつ単に推定上の直示的モードの内容は、その含意する存在命題が真として保証されない<sup>②</sup>。それ故、非幻覚者と幻覚者がともにもつ（と反ラッセリアンが主張する）直示的モードの内容について、一方が知識をもたらずのに対し、他方はせいぜい偶然的に真である信念をもたらずのみという事実は、それらの同一性を疑うための一つの理由を与えるだろう。少なくとも、知識と偶然的にしか真でありえない信念が行為において同じ因果的効力をもつと信じるべき理由は与えられていない<sup>③</sup>。

## 8

自己知からの批判についてはこれまで無視してきたが、その理由は、私にはそれが少なくとも直示的思想に関しては大した批判であるとは思えないからである。Noonanは特に直示的思想に対してと

いうわけではなく、対象依存的とされる思想一般に対してその批判をぶつけている。私は、より一般的な外在主義が自己知とどう折り合うのかという問題が興味深いものであることを否定しない。だが、対象依存的な直示的思想が自己知とどう折り合うのかという問題はそれほど興味深いものではない。直示的思想は対象依存的思想の中でも、知覚システムに直接依存するという点で他のタイプとは異なる。そして、前節の最後で示唆されたように、対象を見ることは一般にその対象の存在を十分に保証する。そのことによって、自己知からの批判に答えることができよう。

Noonanの議論は、自身の心的状態の内容についての知識と特定の外在的对象の存在についての知識との区別に依拠している。しかしこの区別からは、前者の知識の獲得が後者の知識の獲得とは独立になされることが帰結するわけではない。彼によれば、前者は後者に先立って獲得できると常識的に我々は考えているとのことだが、少なくとも直示的思想に関しては、それは正しくない。実際、自分がある直示的思想を抱えていることを自分ほどのようにして判断するのかを考えてみよう。対象についての判断を一階の判断と呼ぶならば、その判断を含む判断は二階の判断と呼ぶことができる。そこで例えば、「あれは危険な猫だと私は考えている」という形の判断がなされる場面を想像すると、その判断は、「あれは危険な猫だ」という形の判断をするために必要なプロセスを必然的に含んでいると考えられる。つまり、その判断は一階の判断を含む二階の判断である。そして、ここでの一階の判断は直示的に同定された対象につ

いての判断であるから、それが正常な知覚システムに基づくとき、それが含意する存在命題的判断は十分に保証されている。従って、直示的モードの内容についての自己知は、関連する対象の存在についての知識に先立って獲得できるとは言えないし、そのように我々が常識的に考えているというNoonanの主張には根拠がない。

もっとも、対象を知覚すること、その存在を認識することは別であり、対象を知覚しても我々はその存在を疑うことができる。知覚システムは完璧なものではなく、正常に機能していても常に正しい情報をもたらすとは限らないから、自身の知覚的判断を反省的に捉える能力をもつことはそれなりの利点があると考えられる。思うに、対象の知覚とその存在の認識との区別は、その能力に由来するものである。だが、その区別ができるということは、一般の認知的実践においてその区別が実際になされているということを意味しない。通常は、対象を知覚することはその存在を認識することと区別されないだろう。だから、「あれは危険な猫だ」という判断は、「危険な猫だと私が見なす対象が存在する」という判断を非明示的にであれ含意するのが普通である。そもそも、知覚の重要な機能の一つは、対象の存在を知らせることであるからだ。

しかし、自己知は知覚システムの正常性とは何の関係もないのではないかと反論されるかもしれない。つまり、幻覚者と非幻覚者は自己知に関して何の違いもなく、それ故、その自己知は特定の対象の存在についての知識とは独立のものだ、というわけである。多分、一人称的(ないし主観的)視点から見れば、特定の外在的对象の存

在についての判断は誤ることがあっても、自分の心的状態の内容について誤ることはあり得ない、という考えがその根底にあるのだろう。なるほどその考えが正しければ、単に自身の心的状態についての知識から、アプリオリに、特定の対象の存在を導き出すことはできない。だが、幻覚者と非幻覚者が自己知に関して何の違いもないというのは本当だろうか。自身の心的状態の自身に対する透明性において、両者に全く違いがないと信じるべき理由はないように思われる。我々は、自分が夢を見ている状態にあるとき、夢と現実を区別できないかもしれない。だからといって、自分が覚めた状態にあるとき、夢と現実を区別できないわけではない。つまり、自身の心的状態の内容を識別する能力は、自分の置かれた状態によって左右され得るのである。それ故、自身の心的状態についての判断力は、知覚システムが正常に働いているか否かということと無関係であるとは言えない。知覚システムが正常に働いているときは、自分の抱く直示的モードの内容の知識から、アプリオリに、特定の対象の存在を導き出すことは十分に可能であろう。いずれにせよ、対象依存的な直示的思想に対する自己知からの批判は不十分である。

#### 注

(1) 実際にはEvansは記述名 (descriptive name) について論じている箇所、対象依存的でない単称思想を認めている。

(2) 虚構の対象や通常の固有名が関わる単称思想については、Evans (1982, chs.10,11)を参照。

- (3) この例は McCulloch (1988a) から借りた。
- (4) 本稿で「思想」は、フレーゲ的な思想やラッセル的な命題ではなく、信念などと同様に内容を伴う心的状態を指す。また、以下において、「思想内容を帰属する」と言うとき、その種の心的状態ないし態度をもつものと見なすということの意味する。
- (5) cf. Noonan 1986, 1991, 1993, Carruthers 1987, 1988, Bilgrami 1992, pp. 155-177. ただし、私の見るところ、Bilgrami の批判は前二者と実質的に変わらないため、本稿では専ら前二者に言及する。cf. Noonan 1991, pp. 5ff. Carruthers 1987, pp. 21ff. 両者と、Evans 1982, ch. 6 における議論に依拠している。ただし、Noonan は、直示的モードは記述的モードに還元できないという論点から、幻覚者に直示的モードの代わりに記述的モードの思想を帰属することはできず、従って直示的思想は対象依存的でないという結論に飛躍してしまっているが、これは頂けない。その論点から言えることはただ、直示的モードの内容には、記述的モードの内容には還元できない特性があるということだけであり、幻覚者に帰属できる内容はどのタイプであるか（あるいはいかなる内容も帰属できないのか）はまだ言えないのである。「内容」という観念については後に触れる。
- (7) 以下に紹介する彼の議論は、上記の彼の三つの論文のどれにでも見ることができる。が、ここではその最新版(1993, pp. 284ff.)に依っている。
- (8) “subset” という表現はラッセリアンにとって引く掛かる言葉である。Noonan がこの語で意味しているのは、多分、「狭い内容」(注 16 を参照) に似たものであるが、4 節で述べるように、これはラッセリアンに対して論点先取ではないだろうか。
- (9) 後に述べるように、幻覚と正常な知覚を区別し、直示的思想の成立が後者に大きく依存しているとすれば、対象が存在しなくてもよいと言えるかは疑わしい。
- (10) Noonan 1993, § 4. 彼は、固有な名や自然種なども含めて一般的に論じているが、ここでは、直示的思想に関する限りでこの批判に取り上げている。直示詞や固有な名、自然種名辞などにおける対象依存性の性格はそれぞれ異なるように思うが、彼は皆一緒くたにしている。
- (11) McCulloch は最近の著書(一九九五)で心の形而上学的身分について論じており、それは意味の理解についてのウィトゲンシュタインの観点とコミュニケーションについての現象学的反省に基づくものであるが、それは未だ直示的思想を救うには十分でないように思われる。それは、心の形而上学的身分は一般的に外在的な制約を受けるが、特定の場面での特定の対象に依存することはないとする立場(Bilgrami (1992) は明確にそれを主張する)を論駁するのは難しいだろう。
- (12) 同じ環境に居合わせなくても(例えば電話で話しているとき)直示的名辞が使われ得るのは、対話者との共有知識に訴えてアナフォーリックな指示をする場合である。
- (13) 直示が関わるコミュニケーションのより詳細な分析については Evans (1982, ch. 9) を参照されたい。
- (14) いかなるタイプの内容も欠けていると言う必要はない。このことは 7 節の後半で示唆されている。
- (15) McCulloch (1988b, p. 96) も、自分は非対象依存的な単称思想の観念を認めているわけではない、と Carruthers に対して不満を述べている。
- (16) 「狭い内容」とは、本稿の例で言えば、一郎らの心的内容のうち、外在的对象との関係を捨象した後に残る共通の部分とされる。こ

の二分法によれば、「広い内容」は、その共通の部分に外在的对象との関係を付加したものである。Bilgrami (1992)はこの二分法をとらず、独特の全体論(私にはあまり魅力的なものではないが)によって「内容」を説明している。二分法、特に「狭い内容」という観念に対する批判としては McCulloch (1995, Ch.8)を参照されたい。

(17) それ故、真理評価が原理的に可能であることが「内容」の重要な性質であると言える。

(18) そんなことは当たり前だと思ふかもしれないが、ある種の水棲動物は味覚によって獲物や捕食者を察知するのである。

(19) もちろん、対象が音を発している間は聴覚のみによってそれを補足し続けることは可能であろうし、対象が体に触れている間は触觉のみによってそれを空間的に位置づけることができる。だが、ここで要求されているのは、対象を直示的に同定するための人間にとつての一般的な能力であり、それには視覚が不可欠なのである。

(20) この区別は既に Austin (1962)が強調している。

(21) しかしながら、知覚システムが異常であるわけではなくても、文字通り存在しないものを「見る」ことは可能だろう。残像がその例であるし、また生理学的なメカニズムとは関係なしに、一瞬何か(虫や人(幽霊?)など)を見たような気になることもあり得る。だが、このような例は、ラッセリアンを批判するための材料としては使えないだろう。その理由は7節で触れられる。

(22) このような幻覚が実際に可能であるのか私には分からない。ただ、私の議論は主に、反事実的状况を持ち出す議論に対するものであることを強調しておきたい。Noonanの議論は、非幻覚的状况と反事実的(幻覚的)状况との違いが、指示対象が存在するかしな

いかに尽きるという仮定に基づいており、私の議論はそれに疑いを投げかけるものである。また、知覚システムが正常であることは、直示的思想の成立のための必要条件であるが、十分条件ではないことに注意されたい。知覚システムは正常であるだけでなく、適切に用いられなければならない。その意味で、知覚システムの異常を伴わない幻覚者でもしばしば直示的思想をもち損なうことがあり得る。

(23) その推論は、「最初の判断における「あれ」と二番目の判断における「あれ」は同じ対象を指す」という前提を加えれば妥当になるし、実際そのような前提を非明示的に含んでいるのではないかと反論されるかもしれない。だが、そのような前提はその推論にとつて通常は不要だ、というのがここでの重要なポイントである。対象の同一性を疑う余地がない場合、その前提は余分なのである。疑う余地がないとは、疑うことができないうことではなく、疑う必要がないということである(疑う必要もないのに疑う人が「懐疑主義者」という)。日常の認知的実践において我々は、対象が猫であれコップであれ、目を離れた際によく似た別の猫やコップとすり替えられるかもしれないなどと心配することはない。同一性について疑う余地がある場合に初めて、その前提が推論において意味をもつようになる。つまり、その前提が非明示的である場合に推論に含まれていると考えるべき理由は無い。結局、その前提の「不要性」ないし「余分性」は、次節で強調するように、同一の対象を一定時間に互って捕捉し続ける能力に由来するが、二郎のケースが示唆するのは、その「不要性」が、環境の側に変則的事態が生じることが減多にないという事実にも由来するということであろう。

(24) 多分、我々の思考形式が客観的空間図式に基づいているという事

実がこれに関係している。基準 (C) には「自己中心的空間」という言葉が出てくるが、Carruthersが見落としているのは、我々の直示的思想が自己中心的空間だけでなく同時に客観的空間図式に基づいているという事実 (Evans (1982, ch.6)の議論もそれを示唆している) であり、(C) ではその事実を捉え切れないのである。因に、Campbell (1994)によれば、動物も時空的な表象能力をもつが、単一の客観的時空という枠組みは人間の表象能力に特有のものであろうとのことである。私の議論は彼から示唆を得ている。

(25) 同様の論点はChild (1992)にも見られる。

(26) Noonan (1986, p.84)は、ラジオの中に小人がいると信じる未開人 (彼は初めてラジオを見た) について、実際に小人がラジオの中に居た場合にもち得る、その小人についての直示的思想とまさに同じ内容をその未開人はもつことができるのではないかと論じている。この未開人は幻覚を抱いているわけではないと重要な違いはあるが、この例と幻覚者の例は構造が似ていると言える。つまり、もしラジオの中に本当に小人がいたとしたら、それはたまたまのことに過ぎない。この場合、聴覚は、視覚や触覚とは違って、それ自体では物体の存在を保証し得ない、というポイントが重要である。例えば、「パーン」という音を聞くことは、それ自体ではピストルの存在を、推測はできても、保証することはできない。だが、ピストルを見ることは、一般に、そのピストルの存在を保証するに十分である。それ故、この未開人の思考においては、この箱の中には小人がいるにちがいない、という存在に関する推測が先にあるはずである。だから、もし彼が「じじい」の声を酋長の声に似ている「な」と考えたとすれば、その「じじい」はその推測の中で登場する小人にアナフォリックに言及しているも

のと考えることができる。

(27) 実際、知識と真である信念とは行為における因果的効力(ないし説明力)が同じであるとは言えない(たとえ後者がその信念をもつための何らかの正当化を伴っていても)「じじい」がWilliamson (1995, pp.548-50)によって示唆されている。

#### 文献参照

- Austin, J. L., 1962, *Sense and Sensibilia*, Oxford U. Pr. (『知覚の言語』丹治信春・中屋暎進訳、勁草書房、一九八四年)
- Bligami, Akeel, 1992, *Belief and Meaning*, Blackwell.
- Campbell, John, 1994, *Past Space and Self*, MIT Pr.
- Carruthers, Peter, 1987, Russellian Thoughts, *Mind* 96, 18-35.
- , 1988, More Faith than Hope: Russellian Thoughts Attacked, *Analysis* 48, 91-96.
- Child, William, 1992, Vision and Experience: The Causal Theory and the Disjunctive Conception, *Philosophical Quarterly* 42, 297-316.
- Evans, Gareth, 1982, *The Varieties of Reference*, Oxford U. Pr.
- McCulloch, Gregory, 1988a, Faith, Hope and Charity: Russellian Thoughts Defended, *Analysis* 48, 84-90.
- , 1988b, Carruthers Revisited, *ibid.*, 96-100.
- , 1995, *The Mind and its World*, Routledge.
- Noonan, H. W., 1986, Russellian Thoughts and Methodological Solipsism, in J. Butterfield (ed.) *Language, Mind and Logic*, Cambridge U. Pr., 1986, 67-90.
- , 1991, Object-Dependent Thoughts and Psychological Redundancy, *Analysis* 51, 1-9.
- , 1993, Object-Dependent Thoughts: A Case of Superficial Necessi-

ty but Deep Contingency?, in J.Heil and A.Mele (ed.) *Mental Causation*, Oxford U.Pr., 1993, 283-308.

Williamson, Timothy, 1995, Is Knowing a State of Mind?, *Mind* 104, 533-565.

## **How Object-Dependent are Demonstrative Thoughts?**

Takahiro MAEDA

Demonstrative thoughts are object-dependent. After noting that this is a metaphysical thesis, I examine main arguments against it. The aim of this paper is to clarify how object-dependent demonstrative thoughts are, by showing that the thesis of object-dependency can be defended against those arguments. It is my basic strategy to make much of the fact that demonstrative thoughts depend upon perception.

### **Key Words**

demonstrative thought, object-dependency, perception, content, psychological explanation.